

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-16

「一点は墨を使った水墨画で、もう一点は岩絵具を使った彩色画にしたい。墨といっても中国製の唐墨と日本製の和墨とがあってね、唐墨には中国清代の名墨といわれるものもあるが、僕は和墨を使っている。硯で丁寧に磨るんだよ。岩絵具とは、主に鉱石を砕いてつくる粒子状の絵具で、膠液を加えて使う。僕は天然の岩絵具の具を使っている。下のアトリエに色々あるから、手に取ってみたらいいよ」と横田は語りかけるようにゆっくりと話した。肯いた真紀はコーヒーカップとソーサーをサイドテーブルに置いて、「わかりました、ありがとうございます。日本画の豆知識は多少ありますので、要点だけお願い致します。因みに、私は英一蝶や菱田春草の作品が好きです」とやや遠慮がちに言った。

銀座の一流クラブのオーナーママを、長年にわたり采配を振るってきた女の足跡を侮っていたことを改めて知らされた横田は、余計な気遣いはやめて、自然体で振る舞うことが好ましい関係が続けていける秘訣だろうと思うことにした。

専門用語だろうと業界用語だろうと斟酌などしないで使うが、作品を仕上げていく過程で、必要な言葉を真紀にかけることだけは忘れないでおこうと横田は肝に銘じた。

彼は何事にも邪魔されず、白いキャンバスに真紀の裸婦像を描きたい一心だけだった。

「英一蝶とは、洪いね！」

横田は女の選択に意表をつかれたが、それでも率直な感想を述べた。

「『朝妻船』が好きです。しだれ柳と波に浮かぶ小舟に乗る遊女の黒い下げ髪と白い水干に紅の袴の色使いと洗練された構図は、どこか儂げで品格があります」と真紀は湿り声で、横田の表情をうかがいながらそう告げた。

真紀の顔をじっと見つめていた横田は、いきなり弾かれたように立ち上がり、「そうか…、そうだ、そうだ！唇に朱墨をワンポイントで使おう。後は墨の線と濃淡とたらし込みにドラスティックな余白だ！ほら、アイデアが降ってきて墨色のコンポジションと鮮やかな紅色が浮かんできた……。これで半分は仕上がったようなもんだ。本当に一蝶様々だよ。いや、待てよ、これは貴女のお陰だ。ありがとう、ありがとう、ありがとう」と連呼しながら、真紀の手を取って、子供のように無邪気にはしゃいだ。